



雲火焼と赤穂緞通展 Unkayaki & Ako-Dantsu Exhibition

江戸末期から明治にかけて
創り出された
赤穂ゆかりの工芸品

8/17(水)～9/19(月)

鑑賞料300円

【主催】神戸新聞社



大嶋黄谷作の雲火焼や希少柄の「八芒星」紋の赤穂緞通の展示の他、100年の時を経て日本に里帰りした忠臣蔵絵付けの高坂造の洋食器の展示

雲火焼 Unkayaki

雲火焼は江戸時代後期から明治時代初期にかけて【大嶋黄谷】が赤穂の地において生み出した独特の焼きものです。

無釉でありながら精巧な技術で磨かれた陶膚は鈍い光沢を呈し、ある程度人工的に生じさせた窯変の色彩と文様は燃える夕焼け空を連想させます。

しかし残念ながらその陶法を伝える人もなく【幻の雲火焼】と称せられ珍重されていました。

赤穂緞通 Ako-Dantsu

赤穂緞通は、鍋島緞通(佐賀県)、堺緞通(大阪府)と並び、日本三大緞通と呼ばれています。赤穂郡中村(現赤穂市中広)に生まれた「児島なか」という女性によって、江戸末期に考案されました。

明治末期には御召列車の敷物として、天蚕を使用した赤穂緞通が採用され、その後も東宮御船、枢密院王座の敷物として、政府に納入されたそうです。

その風雅な文様は、茶人、名のある料亭、お茶屋などに好まれ、大正から昭和初期にかけては遠く海外にも販路を広げ、全盛期を迎えましたが昭和12年に綿花輸入制限を受けて、緞通場の閉鎖を余儀なくされました。

これ以降、緞通業は衰退の一途をたどったのです。

昭和末期に廃絶の危機に見舞われ、幻の緞通と呼ばれた赤穂緞通は現在、新しい織り手によって復活されつつありますが、その作業は、図案や使用する糸色選びから始まって、すべての工程を1人の織り手が伝統技法を守った手作業で行うため、仕上がる緞通の数は大変少ないのです。

《赤穂緞通実演》

赤穂緞通作家 井関京子によるミニ織機での緞通制作実演 (作家在廊日)